

特別寄稿

研究センターにおける教育貢献について —低平地に関する ASEAN 協働教育プログラムを実施して—

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター

荒木宏之・日野剛徳・三島悠一郎

1. はじめに

法人化後、本学における研究センターの教育への明示的な貢献が議論となっていました。センター教員は、例えば当センターの一部の教員は、工学系研究科の専任教員として、大学院博士前・後期課程の学生の研究指導や講義は勿論のこと、都市工学科と連携して学部や教養の講義も担当してきました。それでもなお何が足りないのだろう、求められている貢献とはどのような在り方が良いのだろうと模索していました。

そのような中、平成25年3月11日（月）から18日（月）まで、通常開講している講義とも異なり、また、隔年で開催している国際研究集会とも違う、ASEANの大学院修士学生を対象とした「低平地に関する ASEAN 協働教育プログラム」を実施することができました。

本稿では、この教育プログラムの実施報告、ならびにその成果と経験に基づき、今後の研究センターの教育への関わり方について若干の考察を試みます。

2. ASEAN 協働教育プログラムの背景と目的

当センターでは、平成3年の設立当初から「世界に貢献できる技術を地方から」をスローガンの一つとして20年以上に及ぶ下記のような国際活動を展開してきました。

- ・国際低平地研究協会 (International Association of Lowland Technology - IALT-) の設置と主宰
- ・低平地に関する国際シンポジウム (International Symposium on Lowland Technology - ISLT-) の隔年開催
- ・外国人研究者との共同執筆による英文図書 の出版
- ・Engineering Index (Elsevier Geobase,

Compendex & Ei Backfile and Scopus) を取得している英文ジャーナル (Lowland Technology International) の年2回発行

- ・外国人客員教授の予算獲得と継続的招聘
- ・工学系研究科都市工学専攻との連携による留学生の受け入れ、などです。

このような中でもとりわけ緊密な交流を続けてきているカセサート大学 (タイ)、ハサヌディン大学 (インドネシア)、並びにベトナム水資源大学 (ベトナム) が今回のパートナーです。



写真 - 1 参加者の集合写真

教育の中心テーマは勿論、「低平地」です。アジアには多くの低平地が存在します。アジアの中で韓国や中国は既に目覚ましい経済発展を遂げています。世界の成長センターといわれる ASEAN 諸国の内、原加盟国は順調に成長していますが、後発加盟国はまだ少し停滞状態にあります。いずれも、今後、飛躍的に発展すると予想されています。これらの国の低平地都市では、わが国が経験し今でも抱えているのと同様に、インフラ整備の技術的課題や環境問題が山積しています。また、洪水や地盤沈下など低平地特有の共通する工学的諸問題もありますし、気候変動に対する低平地の脆弱性も懸念されます。

このようなアジア地域の現状と将来を俯瞰して、ASEAN 諸国の健全な社会経済発展をリードできる人材の育成を本教育プログラムの理念としました。具体的な育成人材像は、インフラ整備における工学的対応や環境問題の解決という実践的で緊急の課題に広い視野と高い専門的知識から取り組み、解決できる能力を有する行政官、技術者、研究者などです。このような重要な教育目的は我々も参加大学の先生も漠然とは理解していることは自明なのですが、明文化し具体的に実践した経験は多くはありません。そこで、学生への実際の講義と併行して各国で教育を担っている先生方による研究・教育セミナーを開き、ASEAN 協働教育の在り方についても議論、模索することにしました。

3. 協働教育プログラムのづくり

まず、今回のキーパーソンを各大学の比較的若手の教員に決めました。例えば、本稿の第一著者や海外の大学の同世代の仲間は20年以上の低平地研究とそれ以上の教育の経験を有しているわけですが、過去の研究成果を学生に伝えるだけではバトタッチが上手く行かないような気がして、次世代を担う学生を育てる若手の先生にこの新しい試みを一緒に考えて欲しかったからです。

それらの先生に相談したところ二つ返事で快諾していただきました。多くの希望者がいたかもしれませんが、各大学の優秀な修士課程学生3名をGPAや英語能力などそれぞれの評価基準で選んでくれました。勿論、ASEANの大学院生への教育だけが目的ではありません。日本人学生こそが海外の学生と共に学び、討議することの最大の効果を楽しむであろうことは想像に難しくなく、我々が日ごろ期待しているところでもあります。就職活動で忙しいこの時期に3名の工学系研究科修士日本人学生と2名の同留学生在が、彼らにとっても大きなチャレンジに参加してくれました。また、本プログラムの開催を知り、タイとインドネシアからシニアの先生2名と博士課程の学生2名も特別に参加してくれました。

本プログラムに都市工学専攻の専門科目「都市工学考究II」を割り当てて2単位を出すことにし

ました。海外各大学における単位認定は、内容等の審査はあるにせよ概ね認められるであろうとのことでした。本プログラムの単位認定のために、海外3大学の先生と日本側講師の講義担当資格審査を研究科で追加承認していただきました。

2単位分・15コマの講義計画を考えるに当たり、考慮した点が二つあります。

一つは従前から本センターで議論していたResearch Based Education (RBE) です。Basedとはいえ研究と教育を上下に繋ぐというのではなく、むしろ横に繋ぐイメージです。つまり、工学系の学生が学んでいること(学問・教育)と現実社会で起こっている問題(社会・研究)の間に存在しがちな段差(乖離)をできるだけなくして、実際の問題や研究の意義を実感しやすいように配慮した教育ということです。これにより学生は自身が取り組む学習と研究の双方の意義と立ち位置を定めることができるわけです。また、これは学生に限ったことではなく、われわれ教員側にとっても研究成果をいかに効果的に教育に反映させるかを再度考える良い機会ともいえます。さらに、昨今注目されつつある「大学院教育の実質化」に関連するコースワークと似たコンセプトともいえるのではないかと思います。

二つ目は、Learning Pyramid (図-1)を参考にしたことです。これはよく知られてはいますが、講義では内容の5%しか身につかず、デモンストレーションでは30%、他の人に教えることで90%が身につくという学習効果の調査結果です。座学講義、演習・実習、講義と関連した現地視察・学習、シニアの教員が語る特別講演、各国の学生

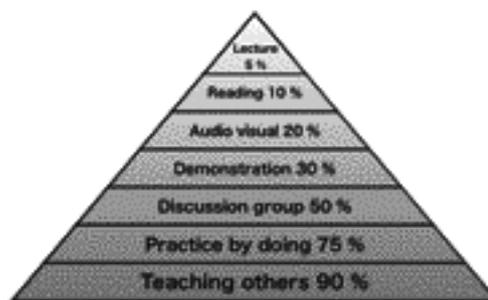


図-1 Learning Pyramid
(% : Fixation ratio of learning for educational method, National Training Laboratory, U.S. より)

を分散させ同胞がいないように構成したグループ学習、当センターの外国人客員准教授とセンター講師（ポスドク）によるグループ学習・討議の支援、自身の修士研究のプレゼンテーション、講師・学生全員による総合討議を効果的に配置しました（表-1）。

当初は教科書を作ることも考えたのですが、2ヶ月の準備期間しか得られなかったため、講義スライドを前もって印刷し、ファイルに綴じることとしました。それでも、教科書作成の構想時に設定したように、単に研究事例や地域事例の紹介に終始することは避け、これらの事例から導き出されてきた低平地の工学的諸問題に関する普遍的考え方、一般化された内容を少なくとも半分以上は含み教科書としての体を成すように努めました。

4. プログラムの様子

開講式では簡単な趣旨説明と自己紹介を行いました。海外の学生の中には英語もうまく何ら臆することなく自己紹介をできる学生もいましたが、多くは初対面のためか、恥ずかしげでもあり緊張している様子もありました。日本人学生もまずまずの自己紹介をやり遂げてくれて、開講前の心配は杞憂に終わりました。座学講義においては、これまで経験している英語による講義や学会発表と大きくは変わらないだろうと予想していましたが、教室の雰囲気と学生の視線の熱さが違いました。異国人、異文化、異専門分野、初めての先生などから、良い意味のそしてほどよい緊張感が醸し出されたようです。また、各大学から選ばれたという学生の自負もあるのでしょうか、やる気がひしひしと感じられ、手応えのある楽しい講義ができました。

実質6日間の集中講義に上記の多彩な学習プログラムを詰め込みましたので、講師・学生とも慣れない英語での講義で疲れたと思います。それでも時には討議が夜間に及ぶほどでした。双方の熱心さの横溢だったのでしょう。

後期日程入試期間中の講義を避けるために同日に実施した現地学習では巨勢川調整池（治水）、有明海沿岸道路建設現場（地盤）、有明海（大潮干潮に合わせて出現する広大な干潟）を訪れまし



写真-2 グループ学習の様子



写真-3 セミナー風景



写真-4 講義の一コマ

た。快晴に恵まれた上、ほぼ同時の通訳・解説付きでしたから参加者の理解も進んだと思います。

最終日には、短時間ながら学生による修士論文研究の概要発表を行いました。そのことで、学生達に国による研究や工学的諸問題の共通性と差違を理解させ、かつ自分の研究に自信も持たせたかったからです。また、主催者にとっては、今回の教育（コースワーク）にとどまらず、将来的な研究指導（リサーチワーク）の可能性も探ってたかったからです。



写真 - 5 有明海沿岸道路建設現場の視察



写真 - 7 林田工学系研究科長から受講証を授与され喜ぶ受講生



写真 - 6 閉会式で成果をまとめる主催者

その後、総合討議を行いました。特に日本人学生においては既に英語にも慣れ親しくもなったので、外国人学生に質問したり、進んで討議に参加したりと、彼らが短期間で確実に一皮むけた印象を持ちました。「英語で自分の考えが伝わったことが嬉しかった。」(日本人学生)と聞いた時は、良い機会を提供してやれて良かったと思いました。専門的なことに関しては、外国人学生も同様ですが、低平地という馴染みのなかった内容や「低平地学」といういわば学問体系の思想・哲学を伝えられ、若い頭脳を刺激できたと自負しています。

最終日の林田研究科長による受講証(単位証明書)授与式では、「疲れたけど面白いプログラムに参加できて良かった。」というように学生の顔はみな晴れやかで誇らしげでした。

その後のサヨナラパーティーでも感謝や高い評価の言葉が得られ、参加者の充実感に主催者側も満足の笑みでした。

5. プログラムのアンケート結果と課題

将来的により充実したプログラムとして継続するために、アンケートをとりました。図-2はその結果であり、右端の数値は5点満点での平均値です。以下ではアンケートの記述式回答や参加者と直接意見交換した内容を踏まえて分析を加えています。

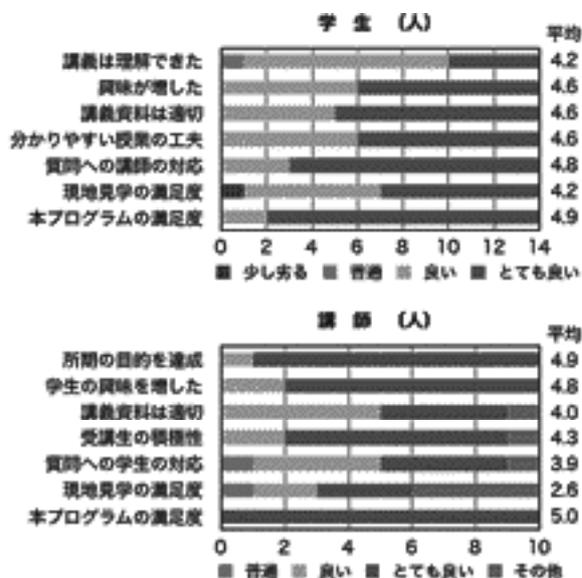


図-2 講義アンケート結果

全体としては学生、講師共に本プログラムに大変満足したことが分かります。自由意見でも、高評価、感謝、継続開催への期待など数多くありました。主催者側としては面目をほどこしたと言えるわけですが、回答を質問毎に見ていくとサンプル数が少ないとはいえ、参考になることが少なからずあります。

まず学生の回答です。プログラム全体への満足

度は非常に高いにもかかわらず、講義理解、現地見学で普通以下の評価があり平均点も他に比べ低くなっています。これは、同じ土木系とはいえ、学生の所属する大学または専攻が水資源、環境、土木と違いがあることに大きな要因があるようです。他の設問の、興味が増した、講義資料、授業の工夫、質問への対応など講師側の努力に対する評価は上述の設問に比べて良いことから、学部時代に学習していない科目があると難しく感じたように思われます。環境や複雑な工学的課題を取り上げる大学院教育におけるコースワークの必然性を垣間見ることができます。

次に講師です。講師のについては、その他として意見も求めましたが、見方が様々で単に良い悪いの評価ではなく、今後の発展のための提案が多く出されました。現地見学については、学生と同様に興味の差が出たのでしょうか、低い評価あるいは代替意見が多く見られました。一方、講師側の講義に対する自信ともいえる講義の目的達成、学生の興味を増したのように、それらに対応する学生の回答との間にはギャップがあるようです。ある意味で講義の常とは言え、学生の専門の違いや教育レベルの不均一性を乗り越える講義のつくり今後工夫が要りそうです。

自由意見や提案を集約すると以下の通りです。

【プログラムの内容】

- ・興味深くとても新鮮で良いプログラム
- ・企画、運営、スタッフの対応がとても良い
- ・スケジュールがタイト
- ・実習、現地見学をもっと多く
- ・総合討議を毎日
- ・各講義の関連性が若干弱い
- ・もっと多くの学生（特に日本人）の参加
- ・専門が違うのもっと平易に
- ・日本（異）文化の理解ができた

【提案】

- ・継続すべき
- ・都市（計画）、数学モデルの講義追加
- ・より適切な開講時期とゆとりのある日程
- ・教科書の作成
- ・多様な講師
- ・単位互換 MOU の締結

- ・デュアルデグリーへの発展
- ・博士課程進学時の奨学金枠の優先配分
- ・RBE は面白い試みだがさらなる吟味も必要
- ・受講生を25名程度までは拡大できる
- ・英語力の確保、または補助者の必要性

一つひとつの意見へのコメントや分析は割愛します。様々な制約もありますが、これらの有意義な意見を参考に改善していきたいと思っています。

6. 研究センターにおける教育貢献のかたち

今回のプログラムは前述のように、考え得る効果的講義を周到にデザインしたコースワークの一つなのですが、なにせ急場仕立てでした。しかし、そこからは有益な課題も得られました。それらを参考にいくつかの視点から研究センターにおける教育貢献の在り方について考えてみます。

(1) 教育のエフォートと効果

まず、教育に対するエフォートをどの程度にするか。教育への努力は惜しみませんが、特定の研究課題と目的を与えられた研究センターですから、仮に50%を越えるエフォートを教育に割いたのでは本末転倒と言われるかも知れません。つまり、博士、修士、学部、教養の全ての教育（講義）を学部の教員と同様に担当することは物理的に不可能になることもあり得るということです。しかし、これでは研究センターの教育貢献が希薄で限定的なものとなるかもしれません。

では、限られたエフォートでどれだけ効果を上げて大学の教育に貢献できるかということになり、効果／エフォート比を上げるしか選択肢はありません。

学生にとって有意義と思われる内容で、多くの教育材料や研究成果を持っている得意分野、当センターの場合は「低平地」、で講義をやるとエフォートは効率的で小さくて済みます。一方、良く練られたコースワークであれば教育効果は大きくなります。これが今回の ASEAN 教育プログラムの大きな意義なのです。

ただし、あまりに専門的すぎる最先端の内容やケーススタディだけでは、偏狭な講義となる恐れがあります。このような内容は博士後期課程また

はリサーチワークの範疇だと考えると、修士の学生を対象とする妥当性が見えてきます。この点が第二の視点です。

(2) 対象とする学生

では、学部学生に対する専門科目は無理かということになります。学部の場合、基礎的な専門科目に力を注ぐ必要があります。例えば、当センターの教員の一部は関連の深い都市工学科のコースワークを構成する基礎的講義を専門分野に応じて開講しています。これらとは別に「低平地」の講義をするとすると、基礎専門科目とかなりの内容的重複が生じる恐れがあり、それらを合わせた総合的な効果／エフォート比が低下します。

しかし、「低平地」が本学の特色ある研究の一つであり受験生や学生にアピールできるものとするならば、関連学科の学生を対象とした講義を開講しないのも厭な味が残ります。履修モデルとして関連の講義を繋ぎ、体系化することは可能でしょう。さらに発展させて低平地コースとするならば、大学院進学者の増加にも寄与できるかも知れません。都市工学科（専攻）と上手い形で教育連繫を再構築できれば、高効率のコースワークとして貢献できるでしょう。

学部教育の一環である教養教育に関しては、そのシステムの理念やづくりが明確になれば、それに対応して、今回のプログラムを日本語で平易にし、かつオムニバス形式で開講することは不可能ではないと思われます。

(3) 教育の内容

次は恐らく最も重要な視点ですが、教育の内容・段階です。今回初の試みであるRBEは一步間違うと高度な事例研究の内容となりかねません。現にアンケートでは現場見学や各国の事例紹介の要望もありました。

しかしながら、それは前述したようにリサーチワークの枠組みに入ると考えています。専門基礎を学んだ修士学生を想定すれば、RBEは基礎を深め応用に近づく段階だと言え、RBEにおいては、高度な実際の問題はそれに必要な事例の提示ではあってもそれが内包する困難な工学的問題の解決に直接アプローチするためのものではないのです。

そういう意味では、特定の解ではなく、一般的あるいは普遍的な知見を伝えるものだと考えています。すなわち、大袈裟に言えば、RBEの極意は学問、ここでは「低平地学」、の思想・哲学を授けることであり、それは基礎を拡げ深め悟らせることであり、特定の問題の解決に自らの力でアプローチできる能力の養成であるといえます。

そのような観点からは、今回の講義内容（範囲）のバランスがベストであったかは疑問が残ります。アンケートにおいては都市計画の講義に関する要望がありました。当然、想定内でしたが準備時間がありませんでした。「低平地学」のためには人間活動の場としての都市（計画）の内容が含まれることでよりバランスの取れたものになると考えています。全体構成の見直しと共に、今後は都市工学科や当センターと密接な交流のあるオランダ、インド、アメリカなどの大学の協力も必要になると思われます。

(4) 育成する人材像

どのような人材を育てたいのか。教育の目標が次の視点です。研究という意味では、研究センターと学部／研究科とに大きな差があるわけではありません。しかしながら、研究センターは、重要でユニークな特定の研究課題を地域、日本、世界という場で先導し、成果を上げることを求められています。

一方、教育とは研究成果の大衆化の手段であるとも言われます。特に、高等教育においてはその意義と重要性が大きいと思われます。さらに、昨今では、グローバル人材の育成や大学教育の国際展開など、日本人学生の国際化と外国人学生の戦略的受入が国策的課題となっています。

ならば、研究センターの担うべき教育とは、そのような特定の研究課題と重要な成果に基づく国際高等教育というのが自然のかたちとなります。

第2節でも述べたように、当センターに課せられたテーマは、幸い「低平地」であり、それは、わが国を含む低平地を抱える国々の重要な課題でもあり、それを専ら研究する当研究センターは世界的にもユニークな組織です。ここで行う教育によって育てようとする人材像とは、おのずから「低平地」が抱える（工学的）諸問題を解決していく

能力のあるリーダーという設定もごくごく自然のこととなります。そのような人材の育成が今回のプログラムの目的であったわけです。語学力や基礎専門科目の修得などを勘案すれば、修士課程の学生を対象とすることが最適だと思われます。

しかしながら、ここではもう少し視野を広げて考えてみたいと思います。それが次の視点です。

(5) フォローアップと知の拠点

本学の大学憲章には、国際貢献として「アジアの知的拠点を目指す」ことが掲げられています。知の拠点とは言うものの、留学生を受け入れ、日本人学生を海外に送り、国際学会に出席し、交流協定を締結するだけでは不十分であることは、これまでわが国の多くの大学が経験してきたことから明白ではないでしょうか。

当センターにおける経験から言わせてもらうならば、特に関係構築の初期段階で重要な点は、キーパーソンと継続性です。キーパーソンとは、こちらの研究や活動を理解し、積極的にそれに参加・協力をしてくれ、周りの人々や国内で信頼され一定の影響力を有する人です。継続性とは、言うまでもなくキーパーソンとあらゆる局面において、関わりを絶やさずにそれを保ち続けることです。むしろ積極的に関わりを持ち信頼関係を創出すると言っても構わないかも知れません。その結果、当センターでは“次の次の”世代の若手研究者との交流が始まっていますし、初代の孫、曾孫にあたる教え子、つまり3世代目、4世代目の学生が留学生として在籍しています。

上記はいわゆるフォローアップのことなのですが、帰国留学生の同窓会的な単純な仕掛けだけでは不十分とも思われます。彼らが技術者や行政官になっているのならば技術者研修、研究者ならば研究交流、教員ならば教育研修や講義を佐賀大学で開き、彼らを招聘するという具合に、具体的な関わりで“次の世代を育てる人”を育てることがフォローアップの要諦だと考えます。今回のASEANプログラムで招聘した講師陣は、すべて初代もしくは2世代目の本学修了生です。

UNESCO-IHE (International Institute for Hydraulic and Environmental Engineering) というオランダのデルフト (デルフト工科大学がある

都市) が発祥であり、そこに本拠地を置く水と環境に関する世界的な研究・教育・研修機関があります。修士号以上の学位授与資格がユネスコから唯一認定された水に関する知の拠点です。当初は途上国を対象として diploma を授与する機関でしたが、修了生は母国の大臣や上級技術者、研究者などになりその国のリーダーとして活躍しています。当然オランダと彼らの国の関係は親密になります。知の拠点の意味を教えてください。好例ですが、日本にも似たような機関があっても良いのではないのでしょうか。

(6) 具体的な計画

理想は分かった。では、具体的にどうするのかとの問いに現状なりにお答えしなければならないでしょう。

ASEAN 協働教育プログラムの継続は重要と考えています。そのために、今回の参加大学に当センターのサテライトを設置する準備を進めています。次回のプログラム開催は1~2年後ですので、その間に内容等を吟味再考して充実を図ります。ASEAN 周辺国の参加や当センターと馴染みの深い欧米講師の招聘も視野に入れています。日本人学生にも魅力的な講義にしたいものです。日本人学生に外国の先生の講義を聴かせると留学のハードルが下がるようです。逆も然りです。

都市工学科 (専攻) との連繋が重要になると考えています。単純な発想ですが、同学科の基盤コース、建築コースと併せて三つの ASEAN 講義プログラムを創設することはさほど難事ではないと思います。性能設計、土木構造物診断、非破壊検査、建築基準、都市計画、BIM/CIM、住環境、防災、地震、土木数値解析などなど、今回も先の ISLT でもアジアの学生さんによく質問されました。ニーズのあるテーマは山ほどあります。都市工学科 (専攻) とは、このような教育面だけではなく研究面も統合した新たな連繋を概算要求することなども検討中です。

工学系研究科においては種々の特色ある研究が展開されています。環境・エネルギー科学グローバル教育プログラムも始動しました。平成25年度も大学の世界展開力強化事業などが文科省で予算化されているようです。国大協からは3月に国

際化のさらなる推進について提言が出されたところです。

現状を勘案した新たな教育・研究の仕組みをどの大型予算にどのように載せるかは、悩ましい決断のしどころかも知れません。いずれにせよ、留学生の相互受け入れ、英語による学部講義、単位互換、ダブルデグリー、ジョイントデグリー、教育期間の分担、大学院生まで含めた国際共同研究プロジェクト（高度なRBE、リサーチワークプログラム）、などは今後考えるべき最低限の検討課題でしょう。今回のASEAN協働教育プログラムがそれらの一助にでもなれば幸いですし、研究科の他の特色ある研究や教育プログラムが、「教育～研究～国際」を軸として立ち上げられれば研究科の特色ある大きな柱にもなると思います。

もちろん、前述のサテライトは「低平地学」に関する研究・教育の世界展開という各国との共同戦略の一環であり、工学系研究科のプログラムや本学の「アジアの知的拠点」の一翼を担えるよう、当センターとしても効率的に努力すべきだと考えています。

7. おわりに

本稿はASEAN協働教育プログラムの実施報告、並びにそのプログラムを企画しその実施に中心的に携わった年嵩、中堅、若手の教員・研究員がセンターの教育について語り合ったことを第一著者が取りまとめたものです。特に第6節の文責は第一著者にあると考えています。読者諸賢のご批判を仰げれば幸いです。

末筆ながら、ASEANプログラムの実施に際し、本学の大学院工学系研究科都市工学専攻、工学系研究科、国際交流推進センター、学術研究協力部国際課ならびに研究協力課の関係各位を始め、本学関係各位の多大なるご協力をいただきました。また、国土交通省と佐賀県には現地見学を快く受け入れていただきました。記して感謝の意を表すると共に、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

表-1 講義プログラム

プログラム	題名・内容	講師
第1回/講義	低平地の工学的諸問題 (プログラムガイダンスを兼ねて)	・荒木宏之教授 (低平地/工学系研究科)
第2回/講義	低平地の水問題と総合水管理	・古賀憲一教授 (工学系研究科)
Research Based Education 1 / 特別講演	2011年におけるタイの大洪水を誘引した水管理の失敗の数々	・ Liengcharensit, W. 特任教授 (タイ・カセサート大学)
Research Based Education 2 / 現地学習 (第3~5回)	巨勢川調整池有明海沿岸道路有明海	・末次大輔准教授 (低平地/工学系研究科) ・ Dundu, A. K. T. 外国人客員准教授 (低平地) ・三島悠一郎センター講師 (低平地) ・木梨真知子センター講師 (低平地) ・Manandhar, S. センター講師 (低平地) ・他講師
第6回/講義	低平地の水災害	・ Don, N. C. 講師 (ベトナム・水資源大学)
第7回/講義	低平地の水環境	・ Vongthanasunthorn, N. 助教授 (タイ・カセサート大学)
Research Based Education 3 / 実験・演習 (第8回)	低平地における地盤工学・環境地盤学特別実験演習	・日野剛徳教授 (低平地/工学系研究科) ・荒木宏之教授 ・加瑞センター講師 (低平地) ・ Dundu, A. K. T. 外国人客員准教授 ・三島悠一郎センター講師 ・木梨真知子センター講師 ・Manandhar, S. センター講師
第9回/講義	低平地の生態環境と工学的管理	・山西博幸教授 (低平地/工学系研究科)
第10回/講義	低平地の地盤に関する対策工法	・ Harianto, T. 准教授 (インドネシア・ハサヌディン大学)
第11回/講義	低平地の地盤防災	・末次大輔准教授
第12回/講義	低平地地盤の堆積環境と形成史	・日野剛徳教授

Research Based Education 4 / 実験・演習 (第13回)	低平地における地盤工学・環境地盤学特別実験演習	・日野剛徳教授 ・荒木宏之教授 ・加瑞センター講師 ・ Dundu, A. K. T. 外国人客員准教授 ・三島悠一郎センター講師 ・木梨真知子センター講師 ・Manandhar, S. センター講師
Research Based Education 5 / 研究発表 (第14回)	修士研究発表	・日野剛徳教授 ・荒木宏之教授 ・ Harianto, T. 准教授 ・ Vongthanasunthorn, N. 助教授 ・ Don, N. C. 講師 ・ Dundu, A. K. T. 外国人客員准教授 ・三島悠一郎センター講師 ・木梨真知子センター講師 ・ Manandhar, S. センター講師
第15回/講義	低平地の工学的諸問題に関する総合討議	・荒木宏之教授 ・古賀憲一教授 ・山西博幸教授 ・日野剛徳教授 ・末次大輔准教授 ・ Harianto, T. 准教授 ・ Vongthanasunthorn, N. 助教授 ・ Don, N. C. 講師 ・ Dundu, A. K. T. 外国人客員准教授 ・三島悠一郎センター講師 ・木梨真知子センター講師 ・ Manandhar, S. センター講師